

病理検査室の窓辺から

囊腫状を呈する症例

斉藤 隆三

PCL 東京 病理・細胞診センター

さまざまな臓器で囊腫状を呈する疾患があるが、皮膚でいうと真皮内に上皮性細胞や結合組織などで囲まれた空洞性病変のことである。表皮囊腫など壁が表皮構造で構成されるもの、毛包腫など表皮―毛包由来、エクリン汗囊腫など汗腺系疾患、気管支原性囊胞など胎生期発達異常や遺残物による囊腫といった多くの疾患が知られている。これらは触診によりゴムまりのような弾力を示す所見や画像検査にて皮膚の中になんらかの貯留物の存在が指摘されることにより、囊腫病変が疑われることになる。

また、病変の一部に囊腫様変化を伴う疾患としては、囊腫を含む細長い分枝状の上皮索をみる毛形成性毛芽腫、脂腺増加が著明な囊腫様構造を呈する脂腺毛包腫、真皮に多数の角質囊腫をみる desmoplastic trichoepithelioma、漏斗部分化を示す多数の角質囊腫をみる毛包腺腫、囊腫状構築を示す毛母腫や皮膚混合腫瘍、囊腫型の基底細胞癌などがある。また、黒色真菌による皮下囊腫様病変は phaeomycotic cyst と呼ばれている。さらに囊腫あるいは囊胞様を病名に含む疾患として、囊腫様リンパ管腫、囊腫性痤瘡、囊胞性面皰性結節性弾力様皮膚、囊胞性線維症、乳頭状汗管囊胞腺腫、皮膚腺様囊胞癌、微小囊胞性附属器癌などがある。一方、口唇や指趾に生じる粘液囊腫は皮膚内のムチン沈着によるもので、囊腫の名称が使われているが、厳密には囊腫病変とは異なり、偽囊腫といわれている。

このように臨床的になんらかの貯留物の存在がみられることから囊腫病変が疑われ、検体が採取されて病理組織検査に回ってくることがある。しかし病理組織学的には充実性腫瘍病変で、その病変の一部が変性壊死に陥っていたり、著明な出血による皮下血腫であることがあり、らせん線維腫、悪性線維性組織球腫などでは病変内に出血を伴って囊腫様構築をみる血管腫型という病型がある。

臨床的に囊腫病変が疑われる場合には病理組織検査により、その性状を明らかにすることが必要である。